

くがつじゅうさんやじんちゅう  
九月十三夜陣中の作  
(うえずきけんしん  
上杉謙信)

霜満軍營秋氣清 数行過雁月三更

越山併得能州景 遮莫家郷憶遠征

しもは ぐんえい  
霜は 軍營に  
みちて 秋氣  
清し

すうこう  
数行の  
かがん  
過雁  
つき  
月  
さんこう  
三更

えつざん  
越山  
あ  
併わせ  
え  
得たり  
のうしゅう  
能州の  
けい  
景

さもあらばあれ  
遮莫  
かきよう  
家郷  
えんせい  
遠征を  
おも  
懐う

解説 謙信が七尾城を破った時、九月十三夜の名月が冴え渡り置酒して月を賞し、この詩を作った。

語釈 ※数行||二・三列、幾列かに並ぶ。 ※三更||三更は十二時とその前後一時間。 ※越山||越後・越中の山山。 ※併得||併せる意。 ※能州||能登の国。 ※遮莫||どうなつてもよいとの意の俗語。

通釈 霜は陣屋をまっ白に蔽<sup>おほ</sup>つて、秋の気は身にしみて清々しい。空を仰げば鳴きながら幾列かの雁が通りすぎ、ま夜中の月は白々とあたりを照らしている。いま首尾よく、この七尾城を陥<sup>めとし</sup>れ、越後、越中の山々と、手に入れた能州のこの風景とを併せて眺めうることは、男子の本懐である。ままよ、故郷にいる家族たちが、遠征のこの身のことを案じていたとしてもそれはいたしかたない。今宵は心ゆくまで、この十三夜の月を賞<sup>め</sup>でようではないか。